

“網”の向うに見えたもの

宣教師のみた黒田孝高②

フロイスにとっては異教徒の島、極東のこの日本で布教するには、当然、黒田官兵衛をはじめ、小西行長や高山右近のような後ろ盾が不可欠でした。なかでも官兵衛は豊臣秀吉の側近として強大な権力を保持しており、このような人物がキリシタンになってくれたことはイエズス会にとって大きな利益につながるものだったとみてよいでしょう。

一方、官兵衛にとって、それだけフロイスらに加担する理由は何だったのでしょうか。そのヒントになるのが、「城踏」No.79でも紹介した次の史料です。

水軍司令長官アゴスチノ(小西行長)が、この人(注：官兵衛)を動かし、網にかけたのであるが、ジェスト右近殿と日野の蒲生殿が、彼を洗礼に導いた。(松田毅一訳 1585年8月27日付、フロイス書簡)



十字架を首に下げた日本人
(文献※p. 55をもとに作成)

官兵衛が受洗したのは高山右近の勧めという向きもありますが(本山一城「黒田二十四騎のドラマ」『稀代の軍師黒田官兵衛』神戸新聞総合出版センター、2008)、フロイスのこの記録から、強く動機付けたのは小西行長だったことがわかります。

官兵衛も含め、そもそも彼ら戦国大名や国人がキリシタンになる理由は何だったのでしょうか。そのことを来日した宣教師は的確に認識していました。

下の諸領主は、この船舶(ポルトガル船)の税金から得る多額の利益を目的とし、その為、同船が自国領に入港することを希望した。そして各領主は司祭やキリスト教徒達が居れば自領の港に最大の利益が齎されるであろうと考え、異教徒であっても、自国の港に司祭達が教会やキリスト教徒を作ることを承認した。このこと、及び司祭との交際によって次第に信仰の火が燃え上がり、大村、有馬、天草のように、領主の或る者はキリスト教徒となった。彼らが教徒になると、その町は容易に改宗し、それに引き続いて領内の者はことごとくキリスト教徒となった。(松田毅一訳 ヴァリニャーノ『日本巡察記』平凡社、1973より)

この史料が記すようにまずは貿易ありきで、そのためには宣教師らの介在が不可欠であることや宣

教師も諸領主の信仰心は貿易の成果によってついてくるものだということを認識していたのです。大名からすれば、キリシタンになることでポルトガル船を介した貿易がうまくいって「多額の利益」が得られと考えたのです。たとえば、上記史料に登場する大村純忠は、貿易のため横瀬浦(長崎県西海市)を開いてポルトガル船の入港税免税だけでなく、当該港にはキリシタン以外の居住を認めず、イエズス会員には住居を無償提供しました。そして横瀬浦で純忠自らコスメ・デ・トレスから受洗したといひます(※フィリップ・レクリヴァン『イエズス会』創元社、1996)。

異教徒たちの港よりも、宣教師がいてキリシタンが保護下にある港のほうが、ポルトガル船が寄港しやすいのは言うまでもありません。免税となれば尚更で、領主自らがキリシタンとなれば取引相手からの信用もいや増すというものです。宣教師が戦国大名らの受洗理由を前記のように認識したのは、通商という点ではお互いの思惑が一致していたからでしょう。

さて、官兵衛を「網にかけた」小西行長の父立佐もキリシタンでした。フロイスによれば、立佐は最も古いキリシタンと認識されており、彼がキリシタンになったのは堺の豪商日比屋了珪の影響が大きいとされています(鳥津亮二『小西行長』八木書店、2010。以後、小西氏関係の記述は本書による)。了珪は九州での対外交易ルートを持ち、信仰云々以前に、貿易ビジネスのために堺とキリスト教を結びつける契機を作った人物で、自身もキリシタンでした。立佐がキリシタンになったのも、そうした経済活動に与するために必要なことを知らされたからと考えられます。その後、小西家と日比屋家は二重三重に姻戚関係を結び、つながりを強めることとなります。立佐は堺の豪商と宣教師やキリシタンとの関係を強みにとときの権力者にも食いこみ、行長に至っては前記の史料にあるように、「水軍司令長官(海の司令官)」と呼ばれるまでに頭角を現していったのです。

小西行長がこうした人間関係や社会環境の中にあって、貿易で得られる経済的利益にも精通していたと考えられます。もともと近江出身の黒田氏は当時いずれも商業盛んな備前国福岡から姫路に移ったと言われており、その経歴に代々受け継がれている商人的性格を看取する(中元孝迪「官兵衛—中核都市・姫路の発見者」前掲『稀代の軍師黒田官兵衛』)ならば、行長のもつ対外貿易のノウハウが官兵衛を動かしたとしても不思議ではないでしょう。

ヴァリニャーノは、日本人の多くは「教えを受け入れるのに真の門から入って来」ず、「貿易の利益に注視し」ていると言いました(前掲『日本巡察記』解題Ⅱ)。官兵衛も、典型的な日本人だったことでしょう。



イエズス会員を乗せた船
(文献※p. 16をもとに作成)